

学徒動員

朝倉郡朝倉町

矢木 文子

『花の蕾の若桜 5尺の命ひっさげて
国の大事に殉ずるわ 我等学徒の本分ぞ
嗚呼紅の血は燃ゆる』

毎朝毎日学徒動員の歌を心に、口に、昭和19年4月私は東洋一と誇った呉海軍工廠火工部という工費（工員さんの給料を計算する部所）に配属されました。火工部は弾丸の中の火薬を装てんする工場なのです。工員は数百名は働いていました。セーラ服にモンペ姿、オサゲ髪の女学校3年生、白い鉢巻きりりと締めて、救急袋と防空頭巾がカバンの代りでした。

戦争も日に日に烈しくなり、アメリカのB29が毎日のように夜屋なく飛来しては呉軍港を狙っていました。ある時は防空壕の中で一夜を明かすこともたびたびでした。私の家は呉軍港を真下に見降ろす山の方でしたから、防空壕は裏山に両親が汗水たらして掘り、近所の人等もそれぞれ一畳ぐらいの部屋を各自掘って、貴重な道具は少しばかり入れていました。

ある日、工員の給料日、呉銀行本店に朝から給料袋にお金をつめるため、上司と私等3人で行きました。仕事中空襲警報が鳴り、と同時に爆音が近くに聞こえ、いざ防空壕に退避、その時のあの恐ろしさは今の胸に焼きついて離れません。「ドカーン、ドスン」となまりのような重圧のある爆弾の音、地響の音、目の前の100円札、50銭玉、1円札、小銭等わずかみに大きなケンパスの袋に必死で詰め込み、両腕の中に抱えて無我夢中で銀行裏の防空壕の中に逃げました。

防空壕の中はどれだけの人が避難しているかわからない程うす暗く、地底からうめいているような恐怖の聲がし、幼児の泣き声を母親が押さえあやしている様子。外はまだドスンドスンと物すごい爆弾の音、大型B29の爆音も混じって私は生きた心地もせず、それでも他の同僚と大事なケンパスの袋をしっかりと両腕の中に、しゃがみ込んで、ただただ、早く敵機が退散して解除になればよいかと祈るような気持ちで、1時間は烈しい空襲があったように思われました。

解除になって外に出てみると、呉海軍工廠の造船部の方から黒煙がもうもうとあちらこちらであがっていました。造船部がやられた、大変だ。工員も相当やられたようだ」という噂が早くも立っていました。私等はまた銀行に戻り、給料袋にお金をつめ、工員さんの帰宅までに間に合わせなければならぬので一生懸命でした。

夕方帰宅すると、母が飛びつくように「あーよう帰って来た、帰って来た、今日の大空襲であんたがどうじゃったかとそればかり心配しよった………」と涙ながらに喜んで迎えてくれました。

朝出勤して夕方帰るまでは一日一日が戦争でした。特に呉は軍港と海軍工廠、また軍需工場

が有るため、まや海兵団も有り、呉の町は活気は有りました。しかし敵のいい鴨ですから、一日として空襲の無い日はありませんでした。呉湾には大きな航空母艦、駆逐艦、イ号、ロ号の潜水艦等々何十隻と停泊し、私はよく海軍の兵隊さんからキャラメルを貰っていました。

またある日事務所で仕事してる最中、突然B29の音がし、その後に空襲警報のサイレンが鳴り、あわてて出面（工員の給料明細簿、大分厚みがある）をひっさげて皆と工場内の防空壕に逃げる途中、すぐ上空で敵機が機銃掃射をバリバリと打ち出しました。私の逃げる後足に弾丸がはじけて、その土がはじけているんです。ワーツもう駄目だ駄目だと半泣きで、それでも出面だけは右手に持って転げるように防空壕に逃げ込みました。その時、友等も「今のは恐ろしかった。恐ろしかった。死ぬるかと思った」と異口同音に喋り、お互いの無事を喜びました。ほんとうにその時は死んだかと思いました。

防空壕の中では外の事は全く無関心、女子挺身隊の方が白鉢巻締めて、黙々と作業をしておられました。私には、あの人等は陽の目も見ず、ただただ国のために働いている姿が美しくも哀れにも見えました。

またその翌日は空襲が有り、避難する間が有りませんでした。ただただ事務所の中で、男の方に皆が怖い怖いと寄りついてかたまるように事務所の隅に逃げるや否や、敵機と日本機が空中戦争を海の上空でやったのです。私等は海の側が事務所ですから窓からその烈しい空中戦が見えるのです。恐ろしくて恐ろしくて生きた気持ちは有りませんでした。正に映画のスクリーンの空中戦と同じです。敵機は黒煙を吹いて呉湾に墜落しましたが、今だから書けるのですが、あの時は恐ろしくて恐ろしくて、ほんとうによくぞ生きてこられたと神仏に感謝しています。敵機が墜落、また爆弾が海に投下されたりして、爆風で海中の魚の腹部が破裂してプカプカ浮いて、小舟を出して網ですくい上げる者が何人かいましたけど、その魚は美味しくなかったそうです。その夜は呉市が空襲にあい、両親と私は防空壕に逃げました。やがて呉市の繁華街が焼夷弾の攻撃で大火事となり、夜空に真赤な炎と黒煙が呉市を総なめするように燃え、上空では弾丸がちょうど、火の弾となり赤い点線で夜空を敵機の弾丸と日本軍の弾丸が交差して、昼では見えない光景でした。叔父の家がちょうど留守にして丸焼けになりました。

それから1ヶ月後、広島原爆が朝の掃除中に投下され、事務所から遙か先にモクモクとキノコ雲が上空に舞い上って、見る見るうちに大きく広く広がっていくのを見ました。広島叔父夫婦が被爆したので、母は看病に行き、広島は70年来の不作とっていた程水も飲むことはできないとっていました。カヤの中で叔父夫婦は痛々しそうにヤケドをして横たわり、従兄は高校の朝礼中に右肩から腰に被爆し、赤く焼けただれた右腕を肩からタスキをかけて右腕をタスキにもたらせていました。母は被爆していませんけど、看病した時の水や野菜、食物を食べたせいか、叔父夫婦や従兄より早く、白血病肉腫という不治の病で、丸一年入退院をくり返し、大変な医療費を使って、哀れ57才の生涯を遂げました。昭和34年1月でした。叔父夫婦や従兄弟は数年前まで生存して元気でした。

まだまだ体験は沢山ありますけど原稿が多くなりますので以上にしておきます。